

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：31311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04140

研究課題名(和文) 不表出性攻撃による抑うつ発生メカニズムとその介入技法の開発

研究課題名(英文) A novel mechanism for inexpressive aggression to generate depression and the intervention technique for it.

研究代表者

川端 壮康 (Kawabata, Takeyasu)

尚絅学院大学・総合人間科学部・准教授

研究者番号：90565128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)： 怒りを感じていながらそれを表出しない不表出性攻撃が抑うつを発生させる心的メカニズムについて検討した。その結果、従来知られている通り、社会的葛藤場面で、怒りやその反芻、および相手の敵意の知覚が抑うつを高めるとともに、一方で、一般には適応的な働きとされている、自己の感情をコントロールする働きである感情調節も、一定の条件下では抑うつを高めることが明らかになった。また、感情調節について、その個人が所属している文化によって、よく用いられる方法や、その影響が異なってくることもまた示された。

研究成果の概要(英文)： We examined our hypotheses about the mechanism in which inexpressive aggression generates depression. As we expected, anger, anger rumination, and perception of other party's hostile intent enhanced depression in social conflicting situations. Although emotion regulation is generally seen as a positive mechanism, at least under certain conditions, it also enhanced depression. It was demonstrated that one's own cultures affect on which type of emotion regulation uses in a situation, and the affect on depression.

研究分野：臨床心理学

キーワード：不表出性攻撃 抑うつ 感情調節 怒り 社会的情報処理モデル

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、大学生においても、軽度の抑うつ増加や慢性化、低年齢化が指摘されるとともに、その表現形態も従来の自責的なものと変わり、他罰性、強い不安、過剰な元気を特徴とする抑うつが増えている。ネガティブ感情を感じていながら、それを表出せずに敵意やシニシズムを生む場合、すなわち不表出性攻撃は、抑うつの原因の一つとされており、周囲に対する攻撃性を内在していることから、他罰性等を特徴とする近年の抑うつを理解する重要な視点を与えてくれると考えられる。

(2) 攻撃行動に関する主要な理論の一つである社会的情報処理理論では、近年、感情変数を組み込んだ改訂版社会的情報処理モデルが提唱されている (Fig.1)。この立場に立てば、不表出性攻撃は、社会的葛藤葛藤場面、「怒り」や相手の敵意の認知が攻撃を促進する一方、感情調節や攻撃行動の評価の予測によって怒りの表出が抑制されたものと捉えることができる。

(3) 従来の、認知の歪みの修正を主な目的とする抑うつに対する認知行動療法に加えて、ネガティブ感情を適切に処理する介入法を開発し、実践において、これまで取り扱われることがなかった不表出性攻撃にかかる抑うつに対する心理教育を取り入れることは、現代型の抑うつ改善に新たな視点を取り入れることに結びつくと考えられる。

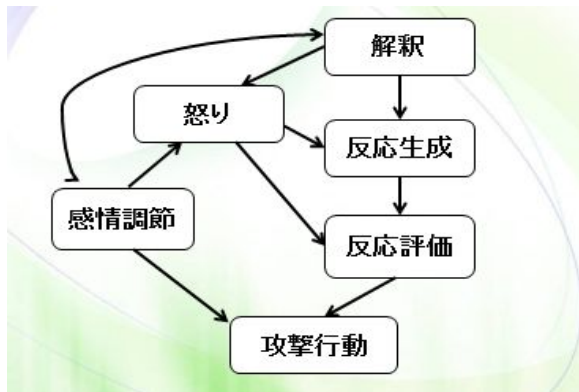


Fig. 1 改訂版社会的情報処理モデル

### 2. 研究の目的

抑うつやうつ病に対する、従来の認知行動療法とその理論では、不表出性攻撃が抑うつを生み出すメカニズムは明らかではなく、こうしたタイプの抑うつに特有の認知の歪みや、さらには、これを扱う予防あるいは治療的な介入技法に関する研究もなされていない。本研究では、不表出性攻撃にかかる抑うつに対する心理教育を取り入れることで、現代型の抑うつ改善に新たな視点を導入することを旨とした。

### 3. 研究の方法

(1) 大学生を対象とした、日常生活の中での怒りとその処理を調査対象とした日誌法により、日常生活の下での不表出性攻撃が抑うつに至る過程を分析する。  
 (2) 大学生や非行少年・犯罪者等を対象とした場面想定法により、条件を操作した実験場面での、怒りから抑うつに至る過程で生じる認知や感情を分析し、仮説モデルの検討・修正を行う。  
 (3) 学生相談等の臨床活動の中で、他罰性等の新たな表現形をとる抑うつ事例を収集し、仮説モデルが実際の事例の理解に有用であることを明らかにする。  
 (4) 上記(1)～(3)を踏まえ、不表出性攻撃による抑うつに対する適切な心理教育的介入技法を工夫・開発するとともに、抑うつ心理教育グループで、その効果を確認する。

### 4. 研究成果

(1) 不表出性攻撃が抑うつを引き起こす過程について、文化による影響を明らかにすることを目的に、ロシアと日本の国際比較研究を実施した。

日本人(206名)とロシア人(243名)の大学生を対象に、あいまいな社会的葛藤場面を提示した場面想定法を用い、怒りや敵意と感情調節(抑制、再評価、気晴らし)が抑うつに与える影響について、攻撃性の社会的情報処理モデルに基づき、比較、分析した。

その結果、以下のことが明らかとなった。ロシア人は日本人よりも、感情調節として抑制を用いる傾向が強い。ロシア人においてのみ、怒りの抑制は抑うつを減少させた。

日本人はロシア人に比較して、感情調節として再評価を用いる傾向が強い。日本人においてのみ、再評価は抑うつを増加させた。

気晴らしは日本人とロシア人の両方で、抑うつを増加させた。女性は男性と比較して、感情調節を用いる傾向が強い。女性の方が男性に比較して、抑うつを感じやすい。

これらの結果は、怒りを抑えることが抑うつを促進するという点、また女性の方が感情を抑制しがちで、抑うつ傾向も高いという先行研究を支持する一方で、一般に、怒りを制御することで適応的な機能を持つとされる感情調節が、うつという新たな不適応を引き起こす可能性があることを示している。そして、主に用いられる感情調節の種類は文化によって異なるとともに、その怒りの制御が精神的健康にもたらす影響についてもまた、文化による違いがあることを示している。

(2) 大学生よりも攻撃性が高いと考えられる、刑事施設において服役中の受刑者を対象に、質問紙調査を実施し、大学生を対象とした研究で明らかにされた、怒りの感情調節と抑うつとの関係を検証した。

累犯刑務所に服役中の男子受刑者 379 名に、

怒り、敵意、感情調節（再評価、抑制）、抑うつ程度、及び社会的望ましさ反応を測定する質問紙を実施した。その結果、刑務所のように攻撃性が厳格に禁止された環境においては、以下の通り、大学生の場合とは異なる結果が示された。すなわち、敵意及び怒りが高いことは抑うつ傾向を促進した。感情調節の抑制を用いる傾向が高いことは、敵意及び怒りを抑制し、そのことによって抑うつ傾向を抑制した。感情調節の再評価を用いる傾向が高いことは、怒りを促進し、そのことによって抑うつ傾向を促進した。

これらの結果は、代表的な感情調節である再評価と抑制についての新たな知見を提供する。すなわち、感情調節の抑制は抑圧等を引き起こし、再評価は精神的健康を促進するとされるところ、本研究においては、先行研究とは逆の結果が得られている。これは、受刑者は敵意や怒りを抑制することに慣れており、それゆえ、彼らは怒りと敵意を抑制することによってそれほど欲求不満や抑うつを感じず、代わりに、怒りや抑うつを含む否定的感情を避けていると考えられる。一方、再評価において、人はその社会的葛藤場面を再考ないし熟考することを求められるので、これがかえって、抑うつの原因の一つである反すう的思考を引き起こしてしまったと考えられる。ロシア人と日本人との国際比較研究の結果も踏まえると、感情調節は、その用いられる環境、社会的状況によって、精神的な健康に及ぼす影響が異なってくることが明らかといえる。

(3) 公募に応じた大学生 46 名を対象に、日誌法を用い、日常生活の中で怒りを感じた経験を尋ね、そのときの怒りがその後の 1 週間の間どのように変化し、他の変数に影響を及ぼすかを確かめるため、腹が立つことがあった 1 日後、2 日後、3 日後、1 週間後の各時期において、敵意、感情調節、怒りの反すう、抑うつについて調査協力者に記載させた。調査にあたっては、生活の中での怒りに関する調査を開始する前に、怒りや敵意、抑うつ、感情調節についての質問紙を実施した。

結果について、調査票開始前に測定した質問紙に基づいて抑うつが高かった群と低かった群とに分け、両群間で各変数を比較したところ、以下のことが明らかとなった。すなわち、抑うつ高群と低群とにおいて、事前調査における感情調節に有意な差は見られなかった。抑うつ高群は低群に比較して、質問紙においては怒りや敵意が高かったが、日常生活の出来事についての評定はそうではなく、両群間に差が見られなかった。抑うつ傾向の高かった群は低かった群に比較して、怒りの反すうを行う傾向が低かった。

これらの結果は、質問紙調査の結果においては、おおむね先行研究を指示しているが、日誌法においては、異なる結果を示している。ここから、こうした抑うつが高い群は、質問

紙等、生活の中で体験されるような生の怒りや敵意といったネガティブな感情を意識することに何らかの困難を抱えている可能性や、あるいは、現実の生活においては、本来経験されているはずの自己の感情を強く抑制してしまう可能性のあることが示唆された。ここから、自己の感情を適切に体験するような心理教育が有効であると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

1. Kawabata, T., Ohbuchi, K., Gurieva, S., Dmitrieva, V., Mikhal'yuk, O., & Odintsova, V. Effects of Inexpressive Aggression on Depression in College Students: Cross Cultural Study between Japan and Russia. 査読有, vol.7, 2016, 1575-1586, DOI: 10.4236/psych.2016.713152

[学会発表](計 3 件)

1. Takeyasu Kawabata, Aggression, Emotion Regulation and Depression in Daily Life. PCS 3rd Annual Mental Health Forum (MHF-2018), 2018.4.29. Prague, Czech Republic.

2. Kawabata, T., & Ohbuchi, K. Effects of Emotion Regulation on Aggression and Depression in Japanese and Russian Students. 31<sup>th</sup> International Congress of Psychology 2016.7.27. Yokohama.

3. Kawabata, T., Tajima, H., & Ohbuchi, K., The relationship between inexpressive aggression and depression in Japanese male prison inmates. 5<sup>th</sup> Violence in Health Sector. 2016.10.26, Dublin, Ireland.

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
該当なし

6．研究組織

(1)研究代表者

川端 壮康 (Kawabata Takeyasu)  
尚綱学院大学・総合人間科学部・准教授  
研究者番号：90565128

(2)研究分担者

古曳 牧人 (Kobiki Makito)  
駿河台大学・心理学部・准教授  
研究者番号：30633416

(3)研究協力者

大淵 憲一 (Obuchi Kenichi)  
東北大学・文学研究科・名誉教授  
研究者番号：70116151